

論文

勝坂式と加曽利E式、伴出事例の再検討

—— 両型式の共伴否定論 ——

西川 博 孝

要旨 勝坂式末期と加曽利E1（古）式が共伴するという考えはすでに常識化しているらしい。その根拠となるのは、竪穴住居跡覆土中で多数の伴出事例が報告されているのに加えて、共伴と判断される事例がいくつか存在するからであろう。しかし、それらの事例は果たして本当に真の同時性を意味する共伴といえるのだろうか。本稿ではそうした事例を再吟味し、両型式の伴出事実は、①古い（前）時代の土器の「送り」行為、②同じく再利用、③発掘事実の誤認によるものであって、両型式の真の共伴事例は存在しないことを主張する。

加曽利E式の成立、いわゆる中峠式の位置付けなど、当該期研究の混沌とした状況を解きほぐすには、伴出事実に幻惑されることなく、相反する出土事例と冷静に比較検証し、型式学的裏付けをもって進めていかねばならないと考える。

1. はじめに

2個体の土器が重なり合って出土したり隣り合って出土した時、2個体の土器は同時期と見るのが考古学的常識であろう。しかし、その2個体の土器が時期の異なる型式であった場合、どのように考えるべきであろうか。

第一は、出土状態（層位学的事実）を優先して型式認定あるいは時期差の認定に誤りがあったとして、これまでの認識を否定ないしは再検討すると考える。

第二は、伴出状態は事実であるものの、これまでの型式認定や時期差の認定を優先して、共伴ではなく何らかの別の事情があったと考える⁽¹⁾。

このどちらかが選択されるであろうが、まずは学史的積み重ねが尊重されて後者を採るのが常道であろう。少なくとも第二の検討を踏まえた上で、第一の検討に進むのが正当な手続きというものであろう。

勝坂式末期と加曽利E1（古）式の関係について、最近、西関東の研究者の間では「対象地域では前型式との共存は既に確認済み、といった感がある」（富井2020）らしい。また、東関東では下総考古学研究会が、「勝坂V式土器」は「加曽利E1式の時期まで使用されていたことを確定できる」（下総考古学研究会：2004 53頁）との見解を示している。その根拠となるのは、竪穴住居跡覆

土中で多数の伴出事例が報告されているのに加えて、共伴と考えられる事例がいくつか存在するからであろう。また、西関東ではさらに両型式の同時共存を論拠として、文化論を論ずるところまで議論が進んでいる（冨井2020）ようである。しかし、両型式の共存はほんとうに実証されたのであろうか。少なくとも上述の第二の検討は十分に行われたのであろうか。以下、確実に伴出したとされる事例について再検証を行なってみたい。

2. 出土事例の検討

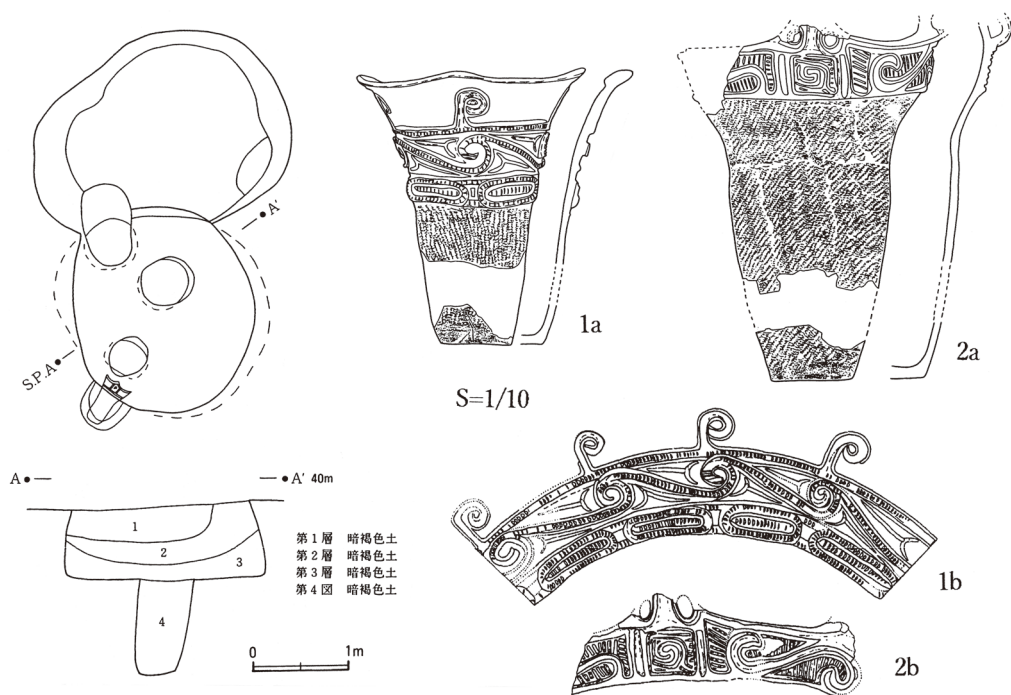
（1）千葉県香取市朝日森遺跡（第1図）

大村裕氏らによって周知された事例である（大村・建石2003）・（佐原市教委1990）。同遺跡9号土坑から、加曽利E式土器と勝坂式土器が入れ子状態で出土した。

まず、土坑の規模や土器の出土状況について、報告書をそのまま引用する。『形状は、北に円形の突出を有する楕円形を呈し、3個のピットをもつ。底面の長径220cm、短径195cm、確認面からの深さ75cmを測る。覆土は3層に分離でき、人為的に埋め戻されたものと思われる。壁面は内湾し袋状を呈する。北側の突出部から1の土器が2の中に入り込んで、横位で口を内側に向け床面レベルから出土した。各ピットの深さは共に1mを測る。（中略）1の（＝筆者補注）底部が覆土の中から出土したことは、興味深いものがある。』

本土坑の規模及び軽い袋状の形態は、この時期の千葉県内に見られる一般的なもので、複数の深いピットを伴うのも同様である。しかし、入れ子状態の土器の出土状況はかなり特殊である。底面の北側壁の掘り込みに、口を土坑中心部に向け横倒しにして納めている。底面の側壁に掘り込みを属性として持つ土坑はまずないから、この掘り込みは土器を納めることを意図して改めて掘られたと理解される。すなわち、土坑としての本来の機能が終わった後、これを転用して土器を埋納したと思われる。また、覆土の堆積状況の所見から埋納後には埋め戻されたと考えられる。さらに、不思議なのは入れ子内側の勝坂式土器1の底部が覆土中から出土していることである。どういう状況の入れ子であったかは報告書に記載はないが、入れ子外側の加曽利E式2は勝坂式より一回り大きい程度であるから、正位の状態の入れ子であったと思われる。そうすると、入れ子内側の勝坂式土器は外側の加曽利E式土器によって保護される状態で埋納されたことになり、その底部が埋納後の攪乱などによって土坑覆土中に動いたとは考えられない。勝坂式の底部は埋納時に意図的に本体から引き離されたことが想定されるのである。

入れ子状態の内側の土器1については、下総考古学会による端的な解説がある（下総考古学会2004 53頁）。すなわち、『体部中央に押し潰されたような楕円区画が4単位配されている（勝坂Ⅳ式の特徴）が、その上の文様帯には区画が消滅しており、横蕨状文と三叉状文が組み合わされた独特の文様が配されている。』と説明し、勝坂Ⅴ式（勝坂式の最終末段階＝筆者注）ないしは勝坂Ⅴ式に影響を受けた土器の一つと位置付けている。また、外側の土器2は口縁部の約3/4が

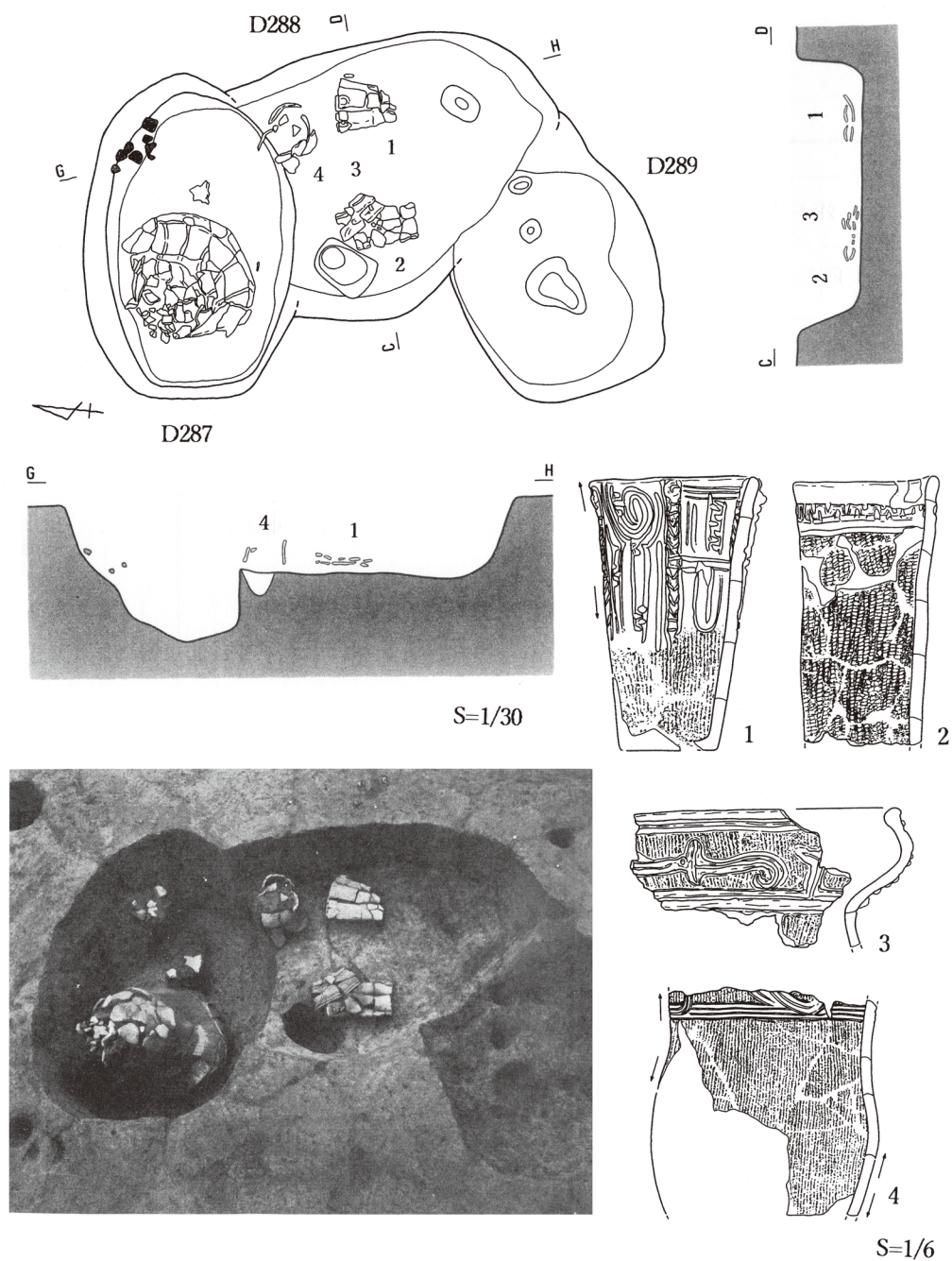


第1図 香取市朝日森遺跡9号土坑および出土土器（土器展開図は大村他2003から転載）

欠失しており、全体の紋様構成が分からないが、残存する眼鏡状突起下が2条単位の隆線により縦区画され、その中を横位集合沈線と中心で折り返す渦巻沈線で埋めている。その両脇の口縁部幅広区画には、一方は2条の隆線による横S字紋が、もう一方は同じ隆線によるおそらくクランク紋が配され、空隙に集合沈線を充填している（大村氏作図による展開図参照）。これらの諸特徴から2は従来から言われている東関東の加曾利E1式であり、最近の下総考古学研究会による見解では「中峠6次1住型深鉢の影響を受けた加曾利E1式（体部懸垂文なし）」に該当しよう（下総考古学研究会：2014）。以上のように、当該期・当該地域の土器に最も精通している同研究会の基準に照らしてみても、1は勝坂式末期、2は加曾利E1（古）式であり、型式を異にすることは明白である。

朝日森9号土坑における型式を異にする土器が入れ子となって出土した事態について、大村氏はどのように解釈しているであろうか。

（大村・建石2003）では「両者は同時に使用ないしは廃棄されたことが確定できる」とした。また、下総考古学研究会は、「勝坂V式土器は（＝筆者注）加曾利E1式の時期まで使用されていたことを確定できる」（下総考古学研究会2004 53頁）、「勝坂V式と加曾利E1式が同時点に使用ないしは廃棄されたことが確定出来る、1等資料といえよう。」（下総考古学研究会2004 91頁）とし、勝坂V式（「在勝」）と阿玉台IV式・加曾利E1式・（中峠各型深鉢？）の併行関係を決定付ける論拠



第2図 西東京市下野谷遺跡288号土坑出土土器および出土状況図（遺構図は早大2001を編集）

の一つとしている。勝坂Ⅴ式と阿玉台Ⅳ式・中峠Ⅰ地点型深鉢の併行関係についてはしばらく置くとして、加曽利EⅠ式と同時期とする発言は、縄紋型式学に対して極めて重大な発言であろう。同会は住居跡内出土土器の詳細な層位的分析を根拠として当該期編年を組み立てる方法論を一貫して展開しており、そのスタンスからすれば、朝日森の出土事例は両型式の同時性を証明する、まさしく垂涎級の1等資料なのであろう。

しかし、型式学的理解に優先させて、異型式土器の入れ子状態による出土を無条件に同時存在を示す事例とするのは、今少し慎重を期さねばならないのではあるまいか。

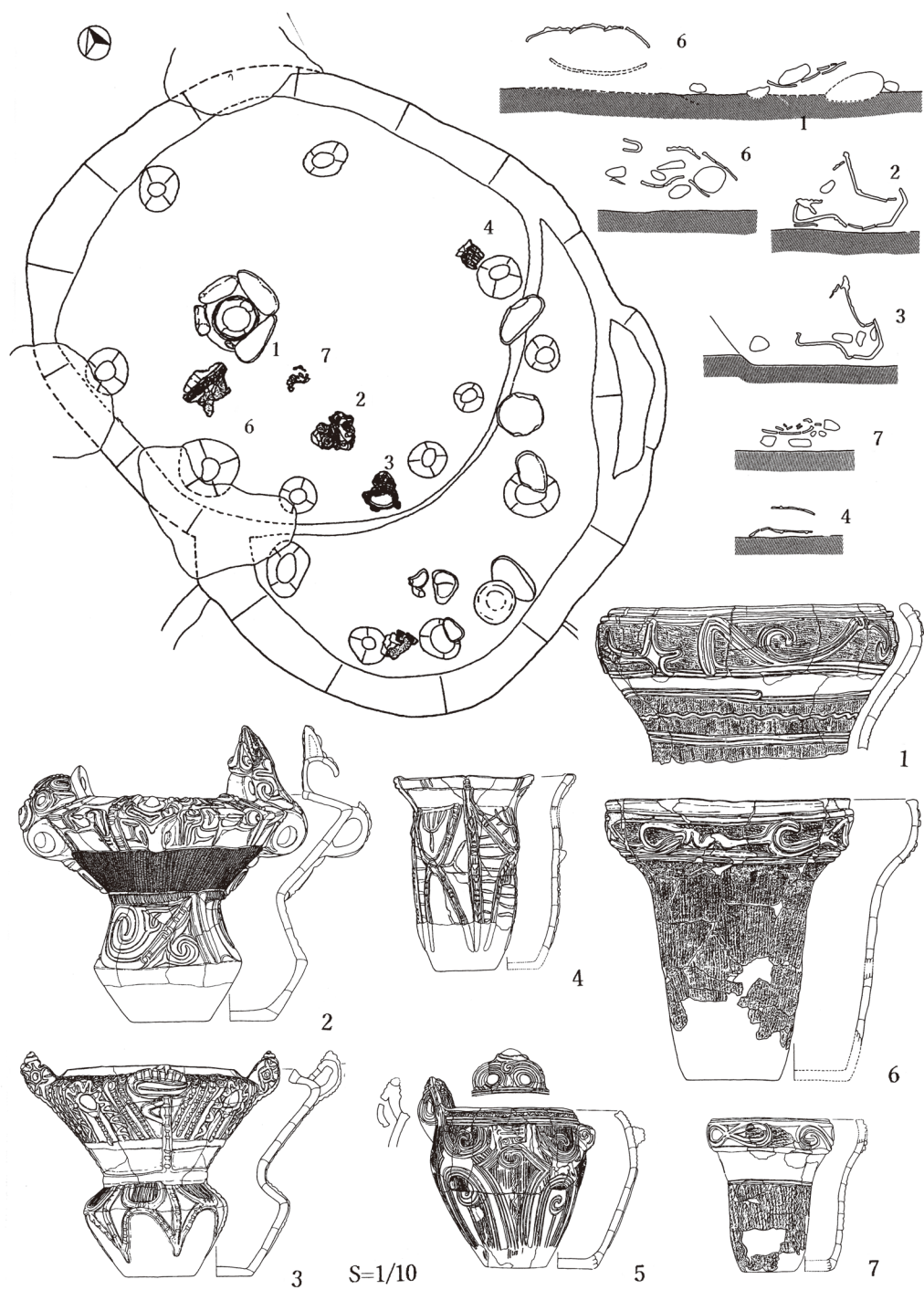
前述したように、本例の出土状況は土坑底の壁面を改めて掘り込んで埋納し、また、入れ子内側の勝坂式土器の底部は本体から意図的に離されていた。この一連の行為はこれを行った縄紋人の何らかの恣意が強く感じられる。筆者はこの行為を「送り」と考えたい。加曽利EⅠ式を使用していた縄紋人が、偶然掘り出されたほぼ完全な勝坂末期の土器を、祖先の使った土器として加曽利EⅠ式土器に入れて彼岸（霊の世界）に送ったのではなかろうか。そうすると、底部を意図的に本体から分離させたのは、土器の機能を完全に断つ送り行為の一環とみることもできる⁽²⁾。このように考えれば、本例の特異な出土状況は合理的に解釈でき、型式学上の矛盾も生じないのである。また、たとえ底部の分離が意図的でなく偶然の結果であった場合でも、「送り」行為そのものの否定にはつながらないであろう。

(2) 東京都西東京市下野谷遺跡（第2図）

下野谷遺跡288号土坑でも勝坂式末期と加曽利EⅠ（古）式が伴出している（早大2001）。墓域と推定された土坑群内に構築されたこの土坑の底面直上からは、勝坂式末期の円筒形深鉢1と2が横位の状態で出土し、2の土器の上には加曽利EⅠ（古）式の口縁部破片3が被された状態で出土した。また、これとは別個体の加曽利EⅠ（古）式の体部4が倒立状態で1の北側の底面から出土している。この事例も明らかに両式の伴出事実を示すものであるが、その出土状態は2個体の勝坂式を人の遺体に見立て、その一方を加曽利EⅠ（古）式の口縁部で覆い、併せて別の体部個体をも甕被りのごとく副葬しているように読み取れる。一般的な廃棄状態とは考えられず、朝日森例と同じくこの行為を行った縄紋人の恣意が強く感じられる。やはり、たまたま掘り出された古い時期の土器を当代の土器とともに「送り」を行ったと考える。

(3) 東京都青梅市駒木野遺跡（第3図）

本例は勝坂式と加曽利EⅠ式がほぼ確実に伴出した例として夙に知られている。26b住居跡では炉体・覆土下層から加曽利EⅠ（古）式が、床面ないし床面直上からは勝坂式末期中部井戸尻系（中山2017）の完形土器2個体が出土した。この事実に対して報告書では一括して第Ⅴ段階とし、「勝坂Ⅲ式新段階とし、加曽利EⅠ式の最古段階が伴う」（青梅市遺跡調査会1998 183頁）、「製作技法の異なる土器が同時に使用・廃棄された住居跡として注目される」（同上：197頁）としている。



第3図 青梅市駒木野遺跡26b住居跡出土土器および出土状況図
 (出土状況図は青梅市教委1998を編集，一部改変)

この見解は朝日森9号土坑における両型式伴出に対する見解と同じである。

しかし、本当にそうなのだろうか。主な土器の出土状況を今一度検討してみる。

土器1 炉内埋設。加曽利E1（古）式で、体部以下を欠く。

土器2・3 床面・床面直上出土。両者は約80cm離れ、ともに勝坂式末期（2は新地平編年で9b期（中山：2017）、3は同じく9c期（中山他：2004））で完形である。横倒し状態で出土し、本来は立位で設置されていた、と解釈されよう。土器3の中には川原石が入り込む。

土器4 床面直上出土。勝坂式末期（新地平編年で9c期（中山：2017））で、底部を欠損する。横位状態で出土しており、欠損により投棄された、と解釈されよう。

土器5 覆土出土。三原田式系統の口縁部紋様をもつ樽型土器⁽³⁾で、約1/2が遺存する。1～6の中で最も上位の出土であり、おそらく加曽利E1（新）式期。

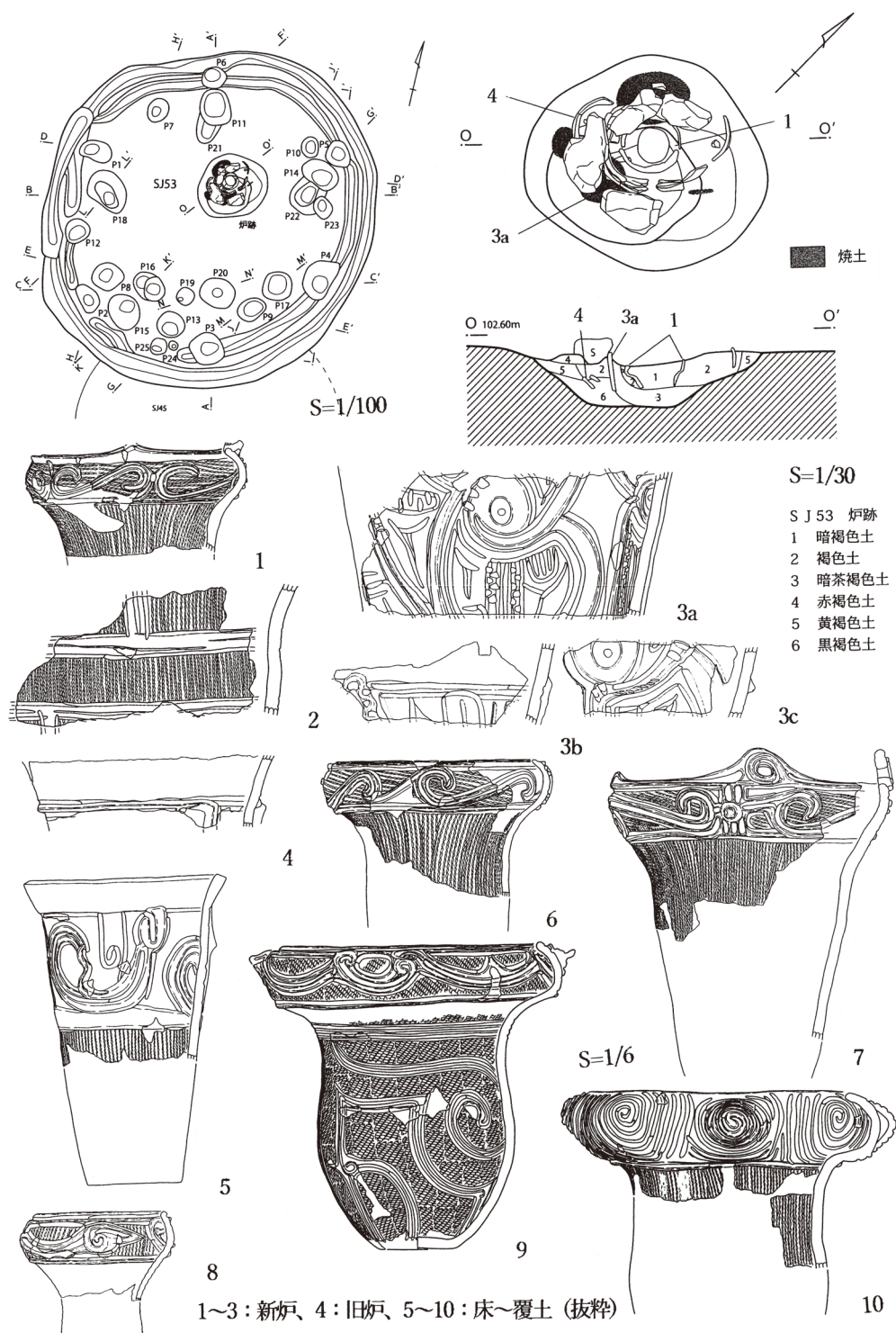
土器6 覆土下層出土。加曽利E1（古）式で、底部を欠損する。斜位状態で出土しており、欠損により投棄された、と解釈されよう。土器中及び直下に川原石が入り込む。

土器7 覆土下層出土。加曽利E1（古）式で、口縁・頸部・体部下半各部が欠損する。横位状態で出土しており、欠損により投棄された、と解釈されよう。床面との間に川原石が入り込む。

このように、炉体土器を除いて各土器の出土状況を検討すると、使用によって破損したため投棄された状況を示す土器4～7と床面・床面直上に設置された状況を示す土器2・3に大別される。床面から覆土上層にかけては、ほぼ全体にわたって大量の川原石が投棄されており、土器2・3を除く土器廃棄状況は川原石とともに吹上パターンを示すといえる。問題は床面・床面直上設置の土器が勝坂式末期であり、炉体土器が加曽利E1（古）式である点にある。この出土状況は下総考古学研究会による層位的出土事例のほぼ1等資料に当たり、普通に考えれば両型式の共伴と捉えられよう。しかし、土器2と3は新地平編年によって時期が異なるとされた。とすれば、9b期の2、9c期の3、10a期の1が共伴していることになる。すなわち、3期にわたる土器が「同時に使用・廃棄された」ことになる。前後する2期の伴出ならともかく、3期にわたる伴出を共伴と認めるならば、型式細分の意味はもはや無用となろう。

しかし、これら3点の伴出状況を共伴と認めない視点から見れば、以下のような解釈が成立しよう。

加曽利E1（古）式期に使用の終わった住居の床面の一部を清掃し、ここに何らかの理由によって発見された完形の勝坂式末期の土器2個体を設置して「送り」の儀式を行い、その後間もなく吹上パターンによる川原石と土器の廃棄（ここでも勝坂期の土器4が混入している）が行われた。「送り」が行われたとする根拠は、ほぼ完全な勝坂式が床面上に立位で意図的に設置された状況を示



第4図 毛呂山町新田東遺跡53号住居跡・炉跡および出土土器（遺構図は埼玉埋文団2012を編集）

第1表 土器片囲い埋甕炉集成

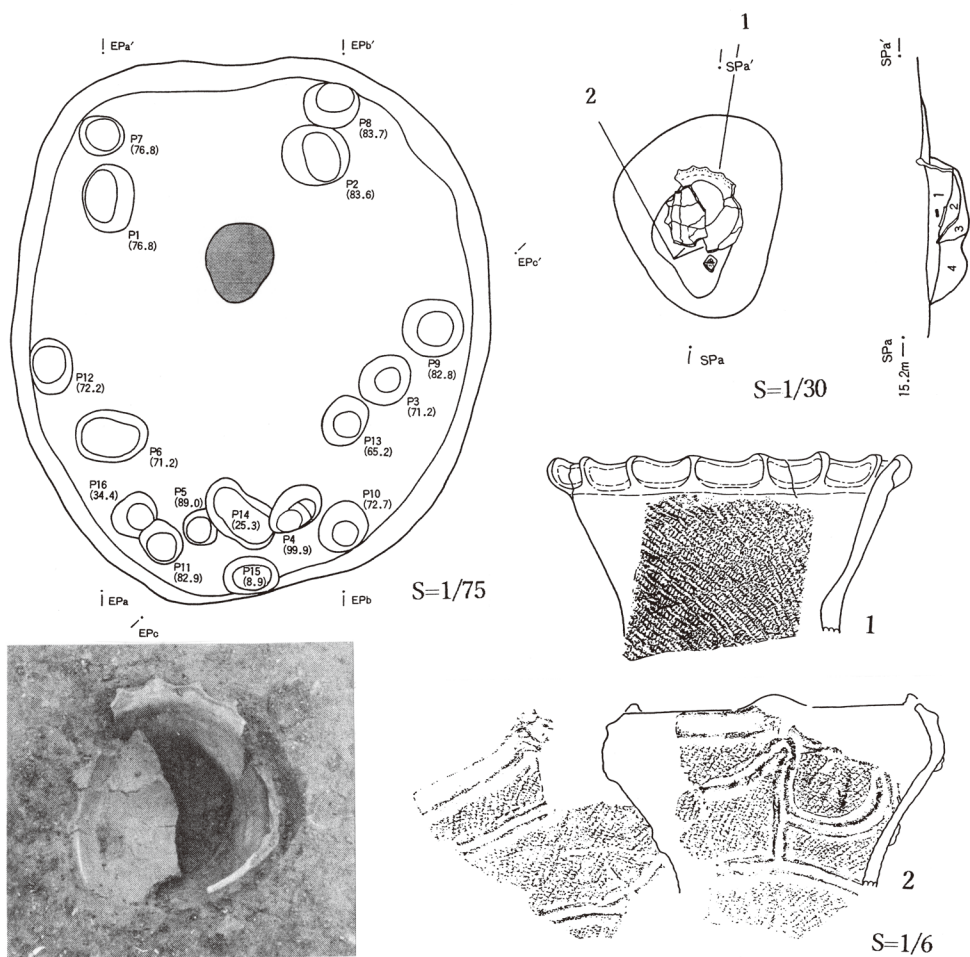
市町村名	遺跡名	住居跡番号	内 容	文献
埼玉県 所沢市	海谷	99号住	共に勝坂式盛期，土器片囲いは2個体， 新・旧炉と解釈せず，石・土器片囲い埋 甕炉	所沢市教委2003
所沢市	海谷	127号住	埋甕加E1（新）式，土器片囲い縄紋の み	同上
毛呂山町	新田東	53号住	埋甕加E1（古）式，土器片囲い同式・ 勝坂式末期	埼玉事業団2012
和光市	吹上原	J7号住	共に加E1（新）式	和光市2015
和光市	吹上原	J34号住	共に加E2（古）式，土器片囲い2個体	同上
ふじみ野市	東台	114号住	共にいわゆる東北系，石・土器片囲い埋 甕炉	大井町史編さん委1988
ふじみ野市	東台	33・34地点 152号住	共にいわゆる初源期加曾利E式	大井町遺跡調査会2005
さいたま市	大古里	5地点3号住	埋甕在地曾利系？，土器片囲い加E1 （古）式	浦和市遺跡調査会1984
神奈川県 寒川町	岡田	109号住	共に勝坂式末期	県営岡田団地調査団 1993
寒川町	岡田	171号住	埋甕は曾利古1式，土器片囲いは図示な し，石・土器片囲い埋甕炉	同上
寒川町	岡田	189号住	共に勝坂式末期	同上
寒川町	岡田	201号住	埋甕は加曾利E1式，土器片囲いは勝坂 式末期・加曾利E？	同上

し，しかもそれが2点で共に優品であるという点である。2点は80cm離れており，2点の間には有機質のものが置かれ，ともに「送られた」可能性も考えられる。送りと廃棄に時間差がほとんどなかったことは，土器3の中及び土器6・7の中やその下に川原石が入り込んでいることから証明されよう。

（4）埼玉県毛呂山町新田東遺跡（第4図）

住居跡の炉における勝坂式と加曾利E式の伴出事例である。

53号住居跡は拡張住居で，埋甕炉であった旧炉を壊して，ほぼ同じ位置に新炉を構築したと報告されている（埼玉埋文事業団2012）。旧炉には勝坂式末期の円筒形深鉢頸部破片4が残り，新炉は加曾利E1（古）式の炉体土器1を加曾利E1（古）式の破片2と勝坂式末期の同一個体大破片3点3a～3cとで囲む土器片囲い埋甕炉であった。したがって，新炉は勝坂式と加曾利E1（古）式の両者を使って構築されていることから，報告書では第Ⅳ期，勝坂式終末期が残存する加曾利E



第5図 蓮田市宿下遺跡第6地点23号住居跡・炉跡および出土土器

I式古段階と解釈された。なお、覆土中からは5～10等、勝坂式末期・加曾利E1（古）式・加曾利E1（新）式・加曾利E2（古）式が出土しており、複雑な堆積過程が想定される。

当該期の土器片囲い埋甕炉は埼玉県南部に集中的にみられるらしい（第1表参照）⁽⁴⁾が、いずれも同時期、同型式の土器が使用されていて、本例は例外的な伴出事例であるもののこれらと同類であろう。

新炉で使われた3a～3cは旧炉の4と同時期と思われ、筆者は新炉の補強のためにたまたま掘り出された古い住居の土器を補強として再利用したと考える。似たような例が神奈川県岡田遺跡201号住居址にある。埋甕は加曾利E1（新）式で、これを囲った土器片には勝坂式末期が含まれていたと報告されている（県営岡田団地調査団1993）。つまりこれらは不作為に古い時期の土器を利用した事例にすぎず、異型式の同時証明を示すものではないと考えられるのである。

(5) 埼玉県蓮田市宿下遺跡 (第5図)

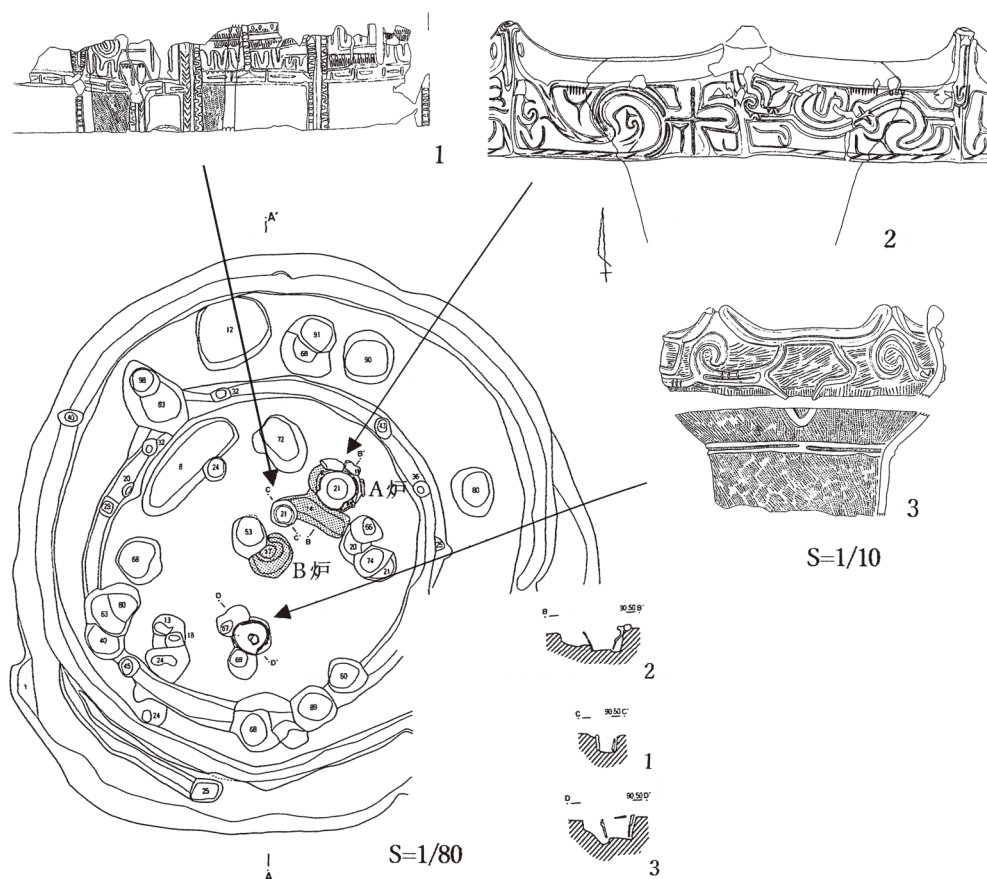
第6地点23号住居跡は、炉体土器として1の勝坂式と思われる口縁部破片と2の加曽利E1式の口縁部大破片2点とを用いている。1は弱い半球形の口縁部器形を持ち、口縁端部に鎖状紋を施す。鎖状紋は鎖の両端が高く盛り上がり、鎖の中に沈線は入らない。同紋様は勝坂式末期の特徴であり、半球形の口縁部器形は阿玉台式後半の特徴とみることができよう。2は口縁から体部にかけて一体的に縄紋を施す、東関東型の加曽利E1(古)式であろう。したがって、これも勝坂式と加曽利E式との確実な伴出事例といえる。しかし、この住居跡も拡張が行われていたとされており、炉の作り替えに伴って勝坂式土器を再利用した可能性を否定できない。

大型破片2個体を埋設した炉形態は稀有な例で、卑見の限りでは千葉県伊豆山台遺跡SI083炉の例しかない(木更津市教育委員会2000)。当該例は勝坂式盛期のもので、破片はやや細かく組み方は宿下例よりも複雑に見える。炉形態として埋甕炉か土器片囲い炉のいずれの範疇に含めるべきか判断に苦しむ。宿下例は埋甕炉の変則例、伊豆山台例は土器片囲い炉と考えておきたい。前者は前述した土器片囲い埋甕炉のうち、複数個体による土器片囲いをもつものや後述する入れ子の埋甕炉の分布域に位置する遺跡例であることから、これらにヒントを得たのかもしれない。

(6) 東京都多摩ニュータウンNo.9遺跡 (第6図)

18号住居跡は報告書によれば小型のB住居跡を大型のA住居跡に拡張したとし、1をBに伴う埋設土器、2をAの炉体土器、3をAの埋甕と解釈している(東京都埋文1999)。1・2は勝坂式末期、新地平編年では1の円筒形深鉢は9a期、2の中戸井戸尻系は9b期に位置付けられ、3は明らかに加曽利E1(古)式(10a期)であるから、報告に従えば2と3は同時期ということになる。3の埋甕をAに属すると判断した根拠は、これに切られたピット2基に貼床がなされていたこと、埋甕上面には貼床はなく焼土が伴っていたことによる。

しかし、この報告の解釈は本当に正しいのであろうか。まず、疑問に思うのは、1が旧住居Bに伴う埋設土器とした点である。1はBの炉から北に離れて埋設されており、何故B(の炉)に伴うと考えたか理解に苦しむ。むしろ、1に続く長楕円形の焼土を示すと考えられる網掛けのかかったピットに伴う炉体土器と見るのが自然であろう。また、A住居跡の壁際及びB住居跡周溝上には切りあったピットが多数あり、18号住居跡全体で拡張が1回のみであったとは考えられない。したがって、型式学的に最も新しい埋甕3が炉体土器2と同時期とする理由はなくなると考える。筆者の解釈では、最も古いのは長楕円形の炉部を伴う1を炉体土器とした段階、次に2を炉体土器とした段階、最も新しいのが3を埋甕とし、報告書ではB住居跡に属するとした地床炉を伴う段階の最低3段階が確實視されよう。もっとも、Bの炉は図ではピットに切られており最新と言い難い。以上、この事例も勝坂式と加曽利E式の共伴例と断定しえないのである⁽⁵⁾。

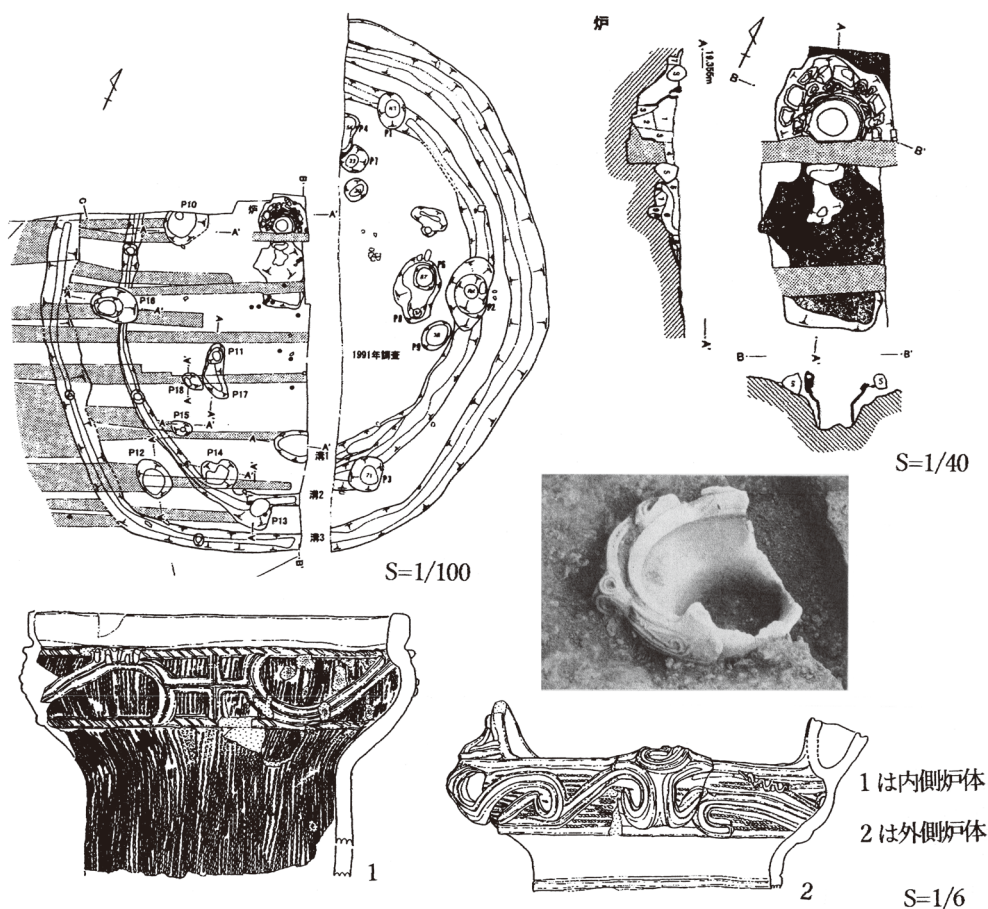


第6図 多摩ニュータウンNo.9遺跡18号住居跡および出土土器

3. 加曽利E 1（古）式・同E 1（新）式の伴出事例（第7図）

埼玉県ふじみ野市西ノ原遺跡では、前項と違い加曽利E 1（古）式と同E 1（新）式の確実な伴出事例がある。124地点67号住居跡からは両型式の炉体土器が入れ子状態で発見された（大井町教委2005）。内側の1は（古）式、あるいは鐙状の無紋口縁や直下の紋様帯の上下区画に刻み目付きの隆線があり、（武蔵野台地型）加曽利E式の粗型（黒沢2017）と見る向きもある土器である。一方、外側の2は半完形の口縁部破片で、口縁突起が発達し横S字紋が眼鏡状突起と一体化していることから、報告にあるとおり加曽利E 1（新）式と捉えられよう。したがって、同時使用されたこの2個体は明らかに時期が異なっていることになる。

この伴出状況について、報告では土器1を住居の形成時期、土器2を住居の継続期を示すと理解している。すなわち、報告者は内側土器1をまず炉体土器として使用し、その後外側土器2を



第7図 ふじみ野市西ノ原遺跡67号住居跡・炉跡および出土土器

かぶせるように補強したと解釈したのであろう。この解釈は2個体の土器が明らかに型式学的に前後するから、入れ子状態でも共伴ではなく、時間差が存在するという妥当な解釈をとっている。しかし、これが仮に勝坂式末期と加曽利E1（古）式の入れ子であったならば、前項（4）の事例と同じく同時共存と解釈されたのではあるまいか。

入れ子状況を示す埋甕炉は他にも例があり（第2表参照）、これらは同型式ないしは同時期の土器を用いたもので、入れ子状態で当初から設置されたものと理解される。加えて本例は石囲いが行われており、型式の異なる土器の入れ子埋設と石囲いは一体的に行われたとみるのが素直な解釈であろう。つまり、加曽利E1（新）式期に埋甕炉を設置するに当たり、何らかの理由で保持していた型式学的に1時期古い土器を内側土器として再利用したのであろう。しかし、事はそう単純ではない。報告では外側土器には内側土器と同様に二次被熱によるハジケ現象が内外面とも著しいと記載されている。内側土器の状況は当然としても、外側土器の状況はよく考えると炉体土

第2表 入れ子埋甕炉集成

市町村名	遺跡名	住居跡番号	内 容	文献
所沢市	膳棚	24号住	共に加E1（古）式	埼玉大学考古研1970
所沢市	海谷	10次15号住	内側狐塚タイプ，外側加E1（古）式	所沢市教委2000
ふじみ野市	西	7号住	共に加E1（古）式，外側は頸部のみ	ふじみ野市教委2009
ふじみ野市	西ノ原	124地点67住	内側加E1（古）式，外側同1（新）式	大井町教委2005

器として設置する前にすでに二次被熱を受けていたことになる。つまり外側土器2もまた再利用品と理解されるのである。

このように、埋甕炉に利用された土器は、埋設されることによって最終的に土器としての機能を終えた状況のみを示しているにすぎず、それ以前にも複雑な利用過程を経ていることを想定する必要がある。前項の事例（4）・（5）も同様の事情があったのであろう。埋甕炉に使用された土器の扱いには慎重を期さねばならないのである。

4. 勝坂・加曽利E両型式共伴の不成立

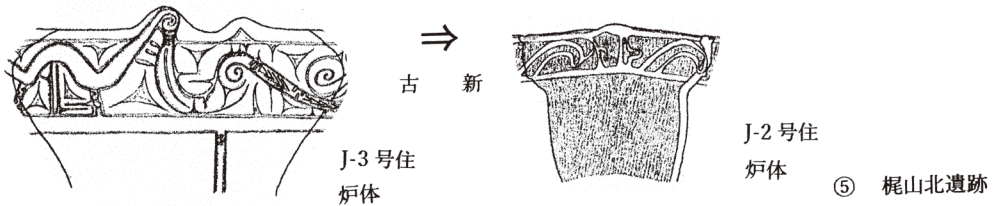
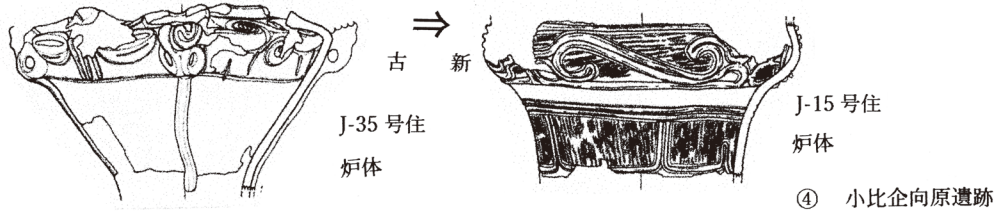
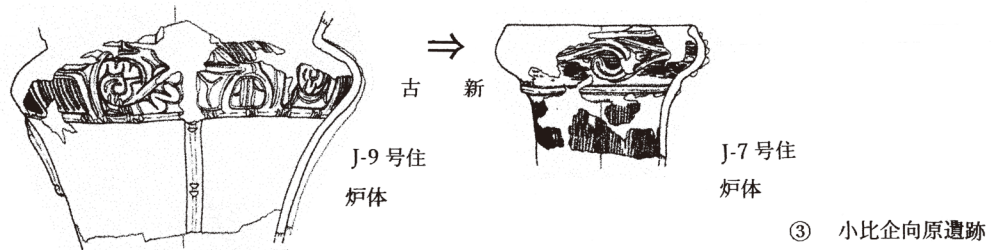
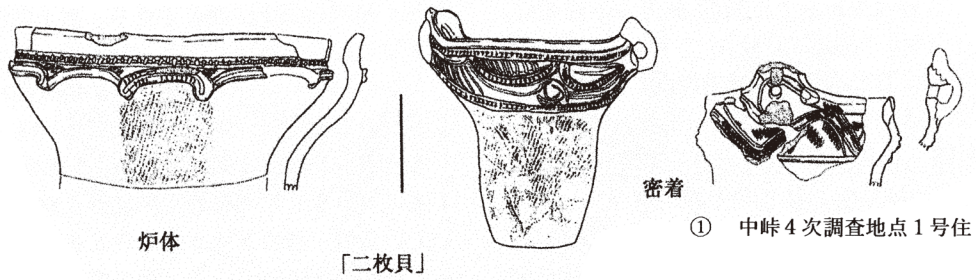
勝坂式末期と加曽利E1（古）式が遺構覆土を除いてほぼ確実に伴出した事例を取り上げて再検討した。このうち、2項（1）～（3）の事例は一般的な廃棄とは考えられない特異な出土状況を示しており、加曽利E1（古）式期における勝坂式末期土器の「送り」行為と考えた。また、2項（4）・（5）の事例は竪穴住居の炉を構築するにあたって、たまたま手近かにあった勝坂式末期の土器破片を再利用したものであって、1時期新しい段階にも3項で見たように同様の伴出事例が認められ、これらの特殊な炉形態は埼玉県南部の地域的特徴を反映した現象であると考えられた。また、2項（6）については事実誤認の可能性を指摘した。

以上のことから、層位的出土事例の1等資料として考えられた勝坂式と加曽利E式の伴出事例の共伴認定はすべて否定されることとなった。したがって、層位的出土事例の3等資料である遺構覆土中の両型式の共伴認定もまた、その信頼性は大きく損なわれることとなるであろう⁽⁶⁾。

なお、両型式の伴出について、型式差を時間差と見る立場から時間的に近接する場合における過渡的現象とする意見もあるらしいが、上記のように理解すればこうした妥協的解釈も無用となろう。筆者は一土器の耐用期間は、型式の存続期間よりはるかに短いと考える。

5. 勝坂・加曽利E両型式の時間差を示す事例

一方、勝坂式末期と加曽利E1（古）式共伴論の立場からは無視されがちであるが、両型式の時



①は、(下総考研 2004 を転載)

第8図 同時併行・新旧関係を示す1等資料

勝坂式と加曽利E式、伴出事例の再検討（西川博孝）

間差を明示する1等資料を蛇足ながら提示しておく。

第8図①・②は東関東の事例である。①は下総考古学研究会によって提示された事例で、中峠遺跡第4次1号住居址において中峠0地点型深鉢が炉体土器として発見され、床面からは勝坂式末期（V式）と阿玉台IV式が出土した（下総考古学研究会2004 88頁）。②は柏市小山台遺跡において中峠6次1住型深鉢（＝加曽利E1（古）式）を炉体土器に持つ（43）SI001が、阿玉台IV式を炉体土器に持つSI002を切っている例である（千葉県教育振興財団2019）。したがって、この2例から中峠0地点型深鉢・勝坂式末期（V式）・阿玉台IV式は同時期であり、中峠6次1住型深鉢（＝加曽利E1（古）式）はこれより新しいことが証明される。

第8図③～⑤は西関東の事例である。③は八王子市小比企向原遺跡例で、炉体土器に勝坂式末期（中部井戸尻系）を持つJ-9号住居址を加曽利E1（古）式を炉体土器に持つJ-7号住居址が切っている例である（八王子市南部地区遺跡調査会1998）。④も同じく小比企向原遺跡例で、炉体土器に勝坂式末期（中部井戸尻系）を持つJ-35号住居址を加曽利E1（古）式を炉体土器に持つJ-15号住居址が切っている例である（同前）。⑤は横浜市梶山北遺跡例で、勝坂式末期（中部井戸尻系）を炉体土器に持つJ-3号住居址を加曽利E1（古）式を炉体土器に持つJ-2号住居址が切っている例である（梶山北遺跡発掘調査団1985）。

なお、3等資料ながら両型式が層位差をもって出土した例として、以下の例が挙げられる。所沢市和田遺跡26・27次7号住居跡では、床直から覆土中層にかけて複数種類の勝坂式末期（9c期主体）が、上層から加曽利E1（古）式が出土したとされている（所沢市教育委員会2019）。伊奈町原遺跡13号住居跡では、覆土下層から複数種類の勝坂式末期及び中峠0地点型深鉢が、上層から加曽利E1（古）式及び同（新）式・曾利式が出土し、間層を挟んでいたとされている（埼玉県埋蔵文化財調査事業団1997）。また、古くから知られているが、東松山市岩の上遺跡23号住居址は床面から覆土下層にかけて加曽利E1（古）式がまとまって出土したが、勝坂式はまったく含まれていなかった（埼玉県教育委員会1973）。

以上のように、両型式の前後関係を示す事例は、関東全体を俯瞰すれば何例も提示できるのである。

6. 結語

勝坂式と加曽利E式の時間差は、従前から炉体土器を持つ住居跡の切り合い関係によって証明されており、遺構内覆土をからめた両型式の層位差、伴出関係には多様なケースがあつて、同時存在の証明にはならないことはすでに指摘されていた。さらに、本論によって両型式がほぼ確実に伴出する事例の共伴関係もまた、成立しないことが確認されたと思う。やはり、勝坂式は古く、加曽利E式は新しいのである。この理解の上に立って、はじめて東西関東における加曽利E式の成立過程、黒尾氏の言う加曽利E1（古）式と「原初的・過渡の様相」の土器（黒尾2017）の弁別、

いわゆる中峠式の位置付けなど、混沌とした当該期の土器研究を正しい方向性をもって議論することが可能となるであろう⁽⁷⁾。次の課題としたい。

本論を草するにあたり、古い土器の「送り」行為については、柳澤清一氏による北方文化における古い土器の儀礼的な扱い（柳澤2015 49頁ほか）がヒントとなり、ご教示もいただいた。また、戸田哲也氏には文献の提供とともに種々ご教示をいただいた。両氏に厚くお礼申し上げる。

注

(1) ここで言う「伴出」とは、同一層位において単に伴に出土した事実のみを指す。一方、「共伴」とは伴出事実を相反する出土事例と冷静に比較検証し、型式学的に吟味した上で、同時期に確実に存在したと認識された歴史的事実と定義する。

(2) 西村正衛教授は貝塚と貝塚から発見される埋葬人骨や人工遺物、動植物遺存体、さらには廃棄された住居跡との間に「なにがしかの思想的一致が存在した」とし、それは「アイヌの物送りということの意味するイオマンテという慣習に類似したものではなかったかとおもう」と指摘している（西村1965）。

また、オホーツク文化の事例として、栄浦第二遺跡25号堅穴の骨塚からは鹿・熊の骨、熊の頭骨、石鏃、骨角器、土器などとともに堅穴より古い時期の土器が出土しており、「何らかの儀礼を行った後にこれらの物を“送った”のであろう」と報告者である武田 修氏は解釈している。併せて、常呂川河口遺跡14号堅穴、網走市二ツ岩2号堅穴の骨塚でも古い時期の土器が出土していることを紹介している。（常呂町教育委員会1995）

(3) 渋川市三原田遺跡8-H14-Lpit例（群馬県企業局1990）、小諸市郷土遺跡11号住例（長野県埋文センター2000）がある。前者がより近い。

(4) 第2表にあるとおり、神奈川県岡田遺跡にも集中して認められる。小林謙一氏によれば、多摩・武蔵野台地にはないらしい（小林2003）。

(5) あきる野市草花遺跡5号住では炉体土器として加曽利E1式、埋設土器として中部井戸尻系の出土が紹介されているが、正式報告はなく検討できない（秋多3・4・6号線草花地区調査団2003）。

(6) 遺構内一括出土土器は必ずしも同時性を示さない。例えば、神奈川県岡田遺跡203号住居址dは吹上パターンが認められたが、一括出土した完形、半完形、大型破片の土器は勝坂式末期・加曽利E1式・同E2式を含んでいたとされている。

また、炉体土器が加曽利E1式、覆土出土が勝坂式末期という逆転事例もある。横浜市山田大塚遺跡16号住居址（横浜市埋文センター1990）、東京都山根坂上遺跡13号住居跡（羽村市山根坂上遺跡（第5次）調査会1993）がこれに当たる。前者は床面直上から勝坂式末期の割れた大型破片が重なって床面直上から出土し、後者は詳細な出土状況の記載はない。しかし、両者はともに炉体土器によく用いられる中部井戸尻系の土器である。炉体土器はしばしば抜き取りが認められるから、これらは掘り返されて後代の住居跡に投棄されたのであろう。横浜市梶山北遺跡J-5号住居址では炉体土器に加曽利E1（古）式が、覆土中からは2点の勝坂式末期が出土している。この逆転現象について、戸田哲也氏は『『層位は型式に優先する』とせばこの事実は問題となろう。しかし、この前提理論はあくまで自然堆積の場合を前提としており、堅穴住居址覆土中土器群（あるいは吹上パターン）という関係の場合では、なお人為的な背景を考慮に入れないといけないであろう。』としている（梶山北遺跡発掘調査団1985）。

(7) 徳留彰紀氏は9c期の円筒形深鉢や中帯紋土器に対して、10a期の同類は地紋施紋が先行するとして、加曽利E式期に勝坂式が残るとされている（徳留2016）が、9c期にも地紋先行の土器はあり、紋様変化

勝坂式と加曽利E式、伴出事例の再検討（西川博孝）

も両者の間で時間差が想定できるほどの変化は認められない。また、それらを出土する10 a期とした堅穴では、多くの例で数型式の土器が混在していて、資料操作に疑問が残る。

確かに加曽利E式期に入っても継続する前時期の類型がある。狐塚タイプは確実に加曽利E式期に変容しながら連続するが、それはこの類型が中部井戸尻系や円筒形深鉢、中帯紋系といった西関東勝坂式の中核をなす伝統的な類型ではなく、西方から勝坂式末期に至って到来した新類型であって、言わば異系統の土器として認識されていたからであろう。

引用文献

- 秋多3・4・6号線草花地区調査団 2003 『草花遺跡—都市計画道路秋多3・4・6号線街路整備事業に伴う埋蔵文化財調査』
- 浦和市遺跡調査会 1984 『大古里遺跡（第5地点）発掘調査報告』
- 青梅市遺跡調査会 1998 『駒木野遺跡発掘調査報告書』
- 大井町史編さん委員会 1988 『大井町史資料編Ⅰ 原始古代・中世編』
- 大井町遺跡調査会 2005 『西ノ原遺跡Ⅳ 東台遺跡Ⅴ』
- 大井町教育委員会 2005 『町内遺跡群ⅩⅡ』
- 大村 裕・建石 徹 2003 「入れ子状に出土した二つの土器—千葉県佐原市朝日森遺跡第九号土坑出土中期縄紋土器の研究—」『佐原の歴史』3号
- 梶山北遺跡発掘調査団 1985 『梶山北遺跡発掘調査報告書』
- 木更津市教育委員会 2000 『木更津市文化財調査集報4—伊豆山台遺跡・金鈴塚古墳—』
- 群馬県企業局 1990 『三原田遺跡』第2巻
- 黒尾和久 2017 「加曽利E1式の多様な系統と勝坂3式との「間」—武蔵野台地型加曽利E式の成立（勝坂から加曽利Eへ）について—」『研究集会 縄文研究の地平2017発表要旨・資料集』
- 県営岡田団地内遺跡発掘調査団 1993 『岡田遺跡』
- 小林謙一 2003 「多摩・武蔵野台地縄紋中期集落の文化要素—土器群組成比と炉形態の基礎的分析—」『セツルメント研究』4号
- 埼玉県教育委員会 1973 『岩の上、雉子山』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997 『原／谷畑』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2012 『新田東遺跡』
- 埼玉大学考古学研究会 1970 『膳棚』『鳳翔』7号
- 佐原市教育委員会 1990 『佐原市内遺跡群発掘調査概報Ⅳ』
- 下総考古学研究会 2004 「〈特集〉房総半島における勝坂式土器の研究」『下総考古学』18
- 下総考古学研究会 2014 「〈特集〉千葉県松戸市中峠遺跡第6次調査の成果」『下総考古学』23
- 千葉県教育振興財団 2019 『柏北部地区埋蔵文化財発掘調査報告書15—柏市小山台遺跡B区—縄文時代以降編』
- 東京都埋蔵文化財センター 1999 『多摩ニュータウン遺跡 先行調査報告14（第4分冊）』
- 所沢市教育委員会 2000 『海谷遺跡第10次調査遺構編』
- 所沢市教育委員会 2003 『第2椿峰遺跡群 海谷遺跡1～9・12・13・16～18次』
- 所沢市教育委員会 2019 『和田遺跡—第26・27次調査—』
- 常呂町教育委員会 1995 『栄浦第二・第一遺跡』
- 徳留彰紀 2016 「武蔵野・多摩地域周辺の土器系統：武蔵野台地北東部の勝坂／加曽利E式」『縄文研究の地平2016—新地平編年の再構築— 発表要旨』

- 富井 真 2020 「土器型式論 中期」『縄文時代』31号
- 中山真治・宇佐美哲也・武川夏樹・黒尾和久 2004 「東京編年表（「東京①・②」）とその解説」『縄文集落研究の新地平3—勝坂から曾利へ—』発表要旨
- 中山真治 2017 「勝坂3式の多様な系統と加曾利E1式との間 9c～10a期の武蔵野・多摩地域の土器類型再考」『縄文研究の地平2017—土器から探る勝坂式と加曾利E式の間— 発表要旨・資料集』
- 長野県埋蔵文化財センター 2000 「郷土遺跡」『上越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19—小諸市内3—』
- 西村正衛 1965 「埋葬」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』
- 蓮田市教育委員会 1989 『荒川附遺跡第7地点・第8地点 宿下遺跡第6地点』
- 八王子市南部地区遺跡調査会 1998 『南八王子地区遺跡調査報告12』
- 羽村市山根坂上遺跡（第5次）調査会 1993 『山根坂上遺跡』
- ふじみ野市教育委員会 2009 『市内遺跡群』4
- 柳澤清一 2015 「北方考古学の新潮流—「逆転編年」説の検証と「オホーツク文化」年代観の改訂—」
- 横浜市埋蔵文化財センター 1990 『山田大塚遺跡』
- 和光市遺跡調査会 2015 『吹上原遺跡（第2次A区～第6次調査）』
- 早稲田大学下野谷遺跡整理室 2001 『下野谷遺跡Ⅲ—縄文時代（墓域）—』

（千葉県東金市日吉台6-12-11）

36頁 第2表へ追加

市町村名	遺跡名	住居跡番号	内 容	文献
飯能市	堂前	3次4号住	共に狐塚タイプ，外側1/2口縁	飯能市教委1986

飯能市教育委員会 1986 『飯能の遺跡（3）』